

は、著者の視角がより多く現代に向けられてゐることは云ふまでもない。恐らく此の部分が本書の中核を形成してゐると云へるであらう。其處に於いて著者は、十九世紀後期以來の文化史と政治史との對立を精神史の立場に於いて揚棄せんとするマイネッケに可成り接近しながら、然しこゝにも安住し得ない現代歴史思想の暗さと動搖を指示されてゐる。そして、このあたりに著者自身の史觀が折にふれて隱現するかの如く感じられる。その點から云ふと第六論文の第七節「民族の復興と運命觀」並びに第五「歴史に於ける自由と運命」講演は、本書中最も興味ある部分であるとも云へるであらう。尤も別に著者自身の立場が其處で特に強く主張されてゐるわけではない。然し讀者は、第三より第六の論文に至る部分を通讀することによつて、現代に於ける歴史學の多様なあり方と多難な行路とをまざまざと眼前にもちつつ、その背後に常に著者自身が大きく浮び上つて來るのを感じずにはゐられないであらう。

讀者の側から云へば、第三、第四及び第六——特に第三の「政治史と文化史」のあたりが、やや西洋史學の専門的知識を必要とする部分でもあらうか。これに對して、第一「教養としての歴史研究」並びに第二、第五のあたりは、一般教養向とも云へるであらう。かやうに、本書各部分の成立の事情が一様でなく、著者が十餘年間の色々の機會に種々の動機で執筆されたものの收録であるために、各部分に於いて程度が同じでないばかりでなく、また重複したところも往々にして見受けられる。然しながら、本書の

各部分を一貫して流れてゐる意識、或ひは精神に至つては、同じである。即ち、本書のもつあらゆる參差不同にも拘らず、それを貫いてゐる一本の樞軸は、實に現代の意識である。若々しい現實の感覺である。これあることによつて、本書は生命を得てゐるとも云ふべきであらう。我國の西洋史學界を代表されてゐる老大家が、同時に最も若々しい歴史的感覺の所有者であることは、讀者をして一驚せしめずにはおかないであらう。その點、現代と歴史學、或ひは現代史學といふ如き問題を論ずるに、著者を措いては他にその人を見ないと云ふべきではなからうか。

單に史學の専門家と云はず、一般に歴史の學に何ほどかの關心を有する人々、或は更に廣く、現代を歴史的に生き抜かんとする人々の座右に、敢へて本書を薦むる所以である。(弘文堂發行 B6判 定價貳圓)。(中山)

回 教 概 論

大 川 周 明 著

大東亞戰爭の進捗するに伴つて、我が國民の視野は自ら弘められることになつた。而して、これに對應する努力が各方面に於て進んで拂はれて居る次第である。素より、今さら早急に知識が攝收されなければならぬと謂ふが如きは、所謂、泥繩のの誹りを受けるべきかも知れないが、過去の迂濶さを徒に責むべき時でない。否、寧ろ、遅れ走せながらでも、正しい認識を國民に與へる

こと急務と謂ふべきである。

この意味に於て、回教に關する正確適切なる知識を興へることも、その一つとして誰しも異論がない所であらう。

勿論、回教に關する著作が從來なかつた譯ではない。好著また少くないと云ひ得るが、茲に、大川周明博士の回教概論を加へ得たことは悦びとすべきである。

嘗て、東亞經濟調査局を訪れた時に、最近購入された多くの回教關係の書籍が、未整理の儘で部屋に充ちて居るのを見て、これが整理されて、盛に利用される時期の早く來ることを祈求した事があつた。

本書を通讀したとき、あの部屋にあつたと思しき幾多の文獻が利用されて居ることを知つて、甚だ心強く感じ、また、ひとり微笑を禁し得なかつた。

「はしがき」に於て、回教乃至回教圈の變遷を極めて要領よく纏められて居り、流石、老巧の筆たるを思はしめるものがある。殊に、回教を纏るのは單に宗教となすべきでない。「實に信者の全生活に關する文化體系の綜合」なることを注意されて居り、これが全卷を通じて隨處に窺はれる所である。

内容は、序説、アラビア及びアラビヤ人、マホメット、古蘭及び聖傳、回教の信仰、回教の儀禮、回教教團の發達、回教法學の發達の八章に分たれ、序説の他、夫々數節に再分され、A五二五八頁からなつて居り、隨所に挿入されたる圖版の類も理解を助ける上に役立つものと信せられる。

勿論、概論たる性質上、特殊問題に互つて深く検討された點に乏しいのは遺憾ではあるが、まは、止むを得ないと云へやう。これは將來、この種の高著の上梓されることを念願する譯であるが、所々に、その片鱗が窺はれることは、誠に慶ばしいことである。

譬へば、第二章に於て、「天幕の民」と、「屋壁の民」とを擧げて多神教に慣れた沙漠の兒たるアラビヤ人が、一躍、絶對唯一神教を稱へたと考へられて居た從來の見解に對する注意を興へ、第三章に於て歐洲の見解に對して、マホメットの立場を擁護せんとする、第四章に於て、聖傳を説いて回教圈に於ける諸方面の思想を觀るに多くの示唆を供し、第七章に於て、政教兩權の關係に就いても、種々の立場よりこれを論及し、本來、政教一如の回教につき、動もすれば歐洲の見解に墮せんとするを避け、更に、最終の第八章に至つては、法學の事とて博士の得意の境地在展開されて居る。唯々惜しいことには、夫々の問題として眞數が少いと云ふ恨みが多いのは、所詮免れ難いところであらう。

回教文化の華やかだつた過去の姿をよく知ることは、やがて、現在回教圈の將來性を探る上に大なる豫備知識となるものである。しかも、その中間過程について飛躍をなすべきでない。我等は回教の沈淪の姿を如何なる相に於て把握すべきか。これに關しても、單に衰微の境涯として輕く取扱ふことは深く警しむべきではなからうか。これについても、歐洲の見解を拂拭すべく、これをなし得て回教の現勢、將來に一隻眼を有し得るに至るのではない

か。これにも確に一石が投ぜられたと思ふ。

興隆の實大に擧らんとする我が回教學の優秀なる一里標石として敢て紹介をなす所以である。(慶應書房刊 定價參圖) (岡島)

世界史の哲學

高山岩 男著

『東西兩洋を包んで行はれてゐる世界史上の大動搖、或は世界史の大轉換は「世界史」なるもの、理念に就いて深刻な反省を要求し、ひいて歴史哲學の根本觀念にも新たな省察を加へることを要求してゐる』と著者も言はれるやうに、現代の世界史性は、一方に於いて歴史家に向つて世界史意識の反省を、他方哲學者に向つては、單なる歴史哲學でなくして、正に世界史の哲學を考察すべきことを要請してゐるのである。高山氏がこゝ數年來現代哲學のこの課題に對して不斷の努力を傾倒して來られたことは、既に周知のことである。氏の數年に亙る思索の結晶が、今かうして一冊の書として纏められ、體系的な世界史の哲學となつて世に出たことは、學界の大いなる喜びでなければならぬ。

本書の内容は極めて豊富で、許された紙數を以てしては、その一半さへも紹介し得られない。況や私の抱く若干の問題に就いて論述すること、又別の機會を俟たねばならない。たゞ本書の根幹となつてゐる思想を簡單に紹介するにとゞめる他はない。

本書を一貫する思想は、十九世紀ヨーロッパ人の抱懷した、世

界史のヨーロッパ一元論に對して、過去の世界史は多元的世界史であり、一元的世界史は正に現代に於いて成立する、と主張する點にある。かゝるイデオロギの上に立つて氏獨特な特殊の世界史・普遍的の世界史の概念を樹立してゐるのである。「ヨーロッパ世界に對して非ヨーロッパ世界が獨立しようとする」現代を行爲的立場に於いて把握する者は、自らの歴史的根柢を單にヨーロッパのみでなく、否却つてヨーロッパと接觸する以前の歴史に見出すのである。ヨーロッパ東漸以前にもわれわれの歴史があり、そこに歴史的世界があると考へることは、現代人の直覺である。普遍的世界史以前に多くの特殊の世界史があつた。それは特に、ヨーロッパに對立し、世界史構成の主體性を獲得しつゝある吾々日本人には、十分理解し得ることである。氏もこの現代的直覺を出發點として、それを客觀的つまり科學的に立論せんとするのである。世界史の理念「歴史の地理性と地理の歴史性」「人種・民族・國民と歴史的世界」「歴史的時間の諸相」「歴史的世界の構造」「世界の系譜と現代世界史」等の一聯の論文は、世界史の理念・空間・時間を通じて特殊の世界史・普遍的世界史の理論に具體的客觀性を與へんとするものに他ならない。世界史の哲學が思考される上に取り上げらるべき問題は一應全部論ぜられ、吾々歴史家に對しても十分教へ又反省せしめるものがある。

思ふに世界史の哲學である以上、單に論理に始まり論理に終る純粹哲學であつてはならない。世界史の哲學がその名に價する大めには、どこ迄も具體的な世界史に支へられ、哲學的妥當性と共